

〔原著論文〕

サリーを買うのは誰か - インドの少数民族の女性の購入決定権へのアクセス -

千葉 たか子¹⁾

Who Buys Sari? Santal Women in India and their Access to Purchasing Power

Takako Chiba¹⁾

Abstract

This paper discusses the social and economic status of Santal women, one of the ethnic minority groups in India, with special reference to their purchasing power. Though they enjoy more freedom compared to their counterparts, women in the general population, they have no access to decision making concerning the household economy, even when buying their own clothes, saris. The reasons for this situation are listed: the patriarchal and patrilineal system of Santal society, protection of women and women's taxing life.

Development does not always benefit women. It can make women's situation worse by depriving them of natural resources on which they depend, thus leading to women's degradation and the lowering of their position in the household and in the society.

(J.Aomori Univ. Health Welf. 9(1) : 9 - 20, 2008)

キーワード：①サントル女性 ②経済的力量 ③社会的地位

Key words : ① Santal women ② purchasing power ③ social status

サリーは、最も優雅な民族衣装のうちの一つであると言われている。確かに金糸・銀糸の入ったサリーは見事で、ピアス、鼻ピアス（ノーズピン、ベンガル語ではナック・チャビ）、ネックレス、腕輪などあらゆる装飾品とともに着飾っている女性をみるとその絢爛豪華さに圧倒される。しかし、ひとたび農村へ行くと、これもサリーかと思うほどにくたびれた布を巻き付けた女性たちが歩いている。インドの経済格差の大きさに再び圧倒される。

では、サリーを買うのは誰か。本研究の対象であるインドの少数民族・サントル民族⁽¹⁾の女性たちの場合、サリーを買うのはそのサリーを着る女性ではなく、彼女たちの夫や父親である。

インドの少数民族の研究者は、「民族ではヒンドゥー社会に比較して、女性の自由度が高い、あるいは女性と男性が社会的に対等な地位にあった⁽²⁾」と報告している (Maharatna 2005:29; Fernandes 2006:113;

Mukhopadhyay 2002:137)。また Chacko (2005) は、「民族の女性たちは、労働に参加し、食物や水資源に平等のアクセスを持ち、自分たちの収入をコントロールできた」という。このような状況は、サントル民族の女性も同様であった (Kaviraj 2001; Singh 1994: 1043)。ならば、比較的高い社会的地位にあるというサントル民族の女性は、なぜサリーを自分で買わないのか。なぜサリーの購入決定権を持たないのか。本稿はこの問いに答えようとするものである。

すべての文化で男性は優位にある。世帯においては年長の男性が長として世帯の支配権を持ち (家父長制⁽³⁾)、世帯の構成員の生殺与奪権ともいえる世帯経済の実権を握る。したがって、女性が世帯の購入決定権へどれだけアクセスできるかは、女性の経済的力量を示すといえる。そして、そのことはまた世帯における妻と夫の関係、すなわち「民主化度」、女性の社会的地位をも示すものである。

1) 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科

Department of Social Welfare, Faculty of Health Sciences, Aomori University of Health and Welfare

インドは近年、目覚ましい経済発展を遂げており、少数民族の村においても開発政策が進行している。しかし、Boserup (2007) が、アフリカの調査を基に示したように開発の成果は女性にも男性にも等しく享受されるわけではない。少数民族の村においても開発の結果、女性の社会的地位が低下している状況が指摘されている (Mukhopadhyay 2002:143)。

本稿では、サンタル民族の女性が着るサリーを「誰が買うのか」に着目し、女性の購入決定権に対するアクセスの度合いを検討することにより、サンタル民族の女性の経済的・社会的状況を明らかにすることを目的とする。

本研究は、2001年から2007年までの間、20数回にわたるインドの西ベンガル州にあるサンタル民族が住む村、ビルブム県 (Birbhum District) のS村とK村、パンクラ県のM村を訪問した際の観察や見聞を基にしている。1回あたりの訪問日数は毎回異なるが、4-10日である。また、2006年8月はS村で、2007年9月はM村で、これらの村で農村開発を行っている開発 NGO・開発調査コミュニケーションセンター (Development Research Communication and Services Centre: DRCS) と連携して活動している村人を対象に個人面接の形式で聞き取りを行った。サンタル民族の多くはサンタル語とベンガル語のバイリンガルなので、聞き取りは日本人の通訳を介して日本語～ベンガル語で行った。ベンガル語が苦手な話し手には、適宜、サンタル民族の通訳を介してベンガル語～サンタル語で行った。

1. 購入決定権と家父長の支配に関する研究

本章ではまず、内閣府が2002年に行った『男女共同参画社会に関する国際比較調査 (平成14年度調査)』の統計資料を基に、「購入決定権を誰が持つか」について国際的な傾向を概観する。そして、家父長の支配が強い国々では、購入決定権が世帯の男性メンバーにあることを示した瀬地山角 (1996) の議論を検討する。

1) 家計費に対する決定権の国際比較調査

内閣府男女共同参画局は2002 (平成14) 年に、韓国、フィリピン、アメリカ、スウェーデン、ドイツ、イギリスの6カ国を対象に男女共同参画に関する意識調査を行った。この調査では、(1) 家計費管理、(2) 貯蓄・投資、(3) 土地・家屋の購入の3つの領域における「家庭における最終決定者」は誰かを比較している (内閣府 2002:105-113)。

これによると、(1) 家計費管理 (家計の決定) は主に「妻・パートナー」がアジア諸国で多く (日本は69.8%、韓国は77.1%、フィリピンは73.2%)、「夫婦・カップル」が欧米諸国で多い (アメリカは48.7%、スウェーデン

は54.9%、ドイツは63.9%、イギリスは49.7%)。(2) 貯蓄・投資の決定に関しては、やはりアジア3カ国と欧米4カ国では違いがある。アジア3カ国では家計費管理の割合より低くなり (40%台後半)、「夫・パートナー」の決定権が強まっている (日本では25.0%で、フィリピン・韓国でも40%弱である)。そして、(3) 土地・家屋の購入になると、欧米諸国では「夫婦・カップル」が多い (アメリカは72.7%、スウェーデンは70.1%、ドイツは74.2%、イギリスは78.4%と軒並み70%を越えている) のに対し、アジアの国である韓国は66.0%、フィリピンは69.5%で、日本の回答は35.7%と欧米の半分程度と低くなる。なお、土地・家屋の購入決定は、日本の場合、主に「夫・パートナー」が持つ (48.6%) ことが大きな特徴である。

このことから、欧米諸国では世帯経済の管理・決定には妻も夫も対等に参加し、妻と夫が共に世帯の運営に参加していることがわかる。つまり、女性も男性も共同生活者として世帯の活動に参加している状況がみてとれる。これに対し、アジア諸国では、家計費管理 (日常の買い物) は主に女性が、大型消費財 (より高価な物品) は男性がというように「分業」がみられる。すなわち、高額な物品の購入の場合ほど、男性の決定権が行使されるケースが大きくなるということである。

購入決定権という視点では、欧米諸国では世帯内における女性と男性の関係が比較的対等にあるが、アジア諸国ではまだ「主 (男性)・従 (女性)」であるといえる。

2) 瀬地山角 (1996) の議論

瀬地山角は、東アジア諸国 (日本、韓国、台湾、北朝鮮、中国) における家父長制についての比較考察をしている。その中の韓国型の家父長制について論じている部分で、1982年 (韓国の調査は1985年) にまとめられた既婚女性を対象とする主婦の生活と意識に関する6カ国比較調査について以下のように紹介している。

土地・家屋の購入に関する決定権は欧米の4カ国 (米、英、独、スウェーデン) ではいずれも夫婦二人で決めるのが70%以上、これに対して日本は59.2%、韓国は41.0%が夫が決める。

家計に関する管理権は欧米では「夫婦二人」が最も多く、「妻」と答えた割合は30%程度にすぎないのに、日本では79.4%、韓国では67.7%が「妻」と答えている (瀬地山 1996:232-233¹⁾)。

瀬地山の報告は日本の内閣府の調査を女性学の視点から検討したものであり、家計へのアクセスの度合いすなわち世帯経済の決定権を持つのは誰か、誰がどれだけ持

つのかということが、世帯員すなわち妻と夫の力関係を示すものであることが明らかにされた。つまり、世帯における家父長の支配の力の大きさ、世帯における「民主化」の度合いを示すものである。

女性が自分の判断で買えるものは何か。この問いは、家父長の支配の力が及ぶ範囲を測る重要な問いであり、世帯における女性と男性の「民主化度」、女性の経済的地位および社会的地位を知る指標となるのである。

2. 購入決定権の指標としてのサリー

ここで、女性自身がサリーを購入することをエンパワーメントの指標とした Hashemi, Schuler & Riley (1996) と坪井ひろみ (2006) を取り上げ、その指標としての有効性について確認する。

1) Hashemi, Schuler & Riley (1996) の視点

Hashemi, Schuler & Riley は、農村女性のエンパワーメント⁽⁴⁾を研究する中で女性たちがエンパワーメントしたかどうかの指標の一つとして「サリーの購入」を使った。彼らはバングラデシュの貧困な農村で農村開発の活動を展開している 2 大 NGO であるグラミン銀行⁽⁵⁾とバングラデシュ農村向上委員会 (Bangladesh Rural Advancement Committee:BRAC) が実施しているマイクロクレジットのプログラムを比較研究し、マイクロクレジットのプログラムが女性のエンパワーメントに効果を挙げていることを検証した。この際、女性たちにとりエンパワーメント効果があったことを示す指標として使用したのが以下の 8 項目である。

- ① mobility (移動性)
- ② economic security (経済的保証)
- ③ ability to make small purchases (小さな物品の購入能力)
- ④ ability to make larger purchases (大きな物品の購入能力)
- ⑤ involvement in major household decisions (世帯における意思決定への参加度)
- ⑥ relative freedom from domination within the family (世帯内の支配からの相対的自由度)
- ⑦ political and legal awareness (政治や法律への関心度)
- ⑧ involvement in political campaigning and protests (政治活動や抗議行動への参加)

(1996:638-639)

これらの指標のうち本稿のテーマである購入決定権に関連するものを取り出すと、③ (小さな物品の購入能力)

と④ (大きな物品の購入能力) である。③ (小さな物品の購入能力) には、石油、料理油、香辛料など日常に使うもの、自分のための髪油、石鹸、腕輪など、こどものためにアイスクリームやお菓子が含まれる。④ (大きな物品の購入能力) には、ポットや鍋、子どもの服、自分のためのサリー、家族の日常の食事のためのものが含まれる。Hashemi, Schuler & Riley は、このような物品を女性たちが自分の裁量で購入できる・したら、それをポイントで示し、基準の点数に達するとその項目においてエンパワーメントしたと判断した。

2) 坪井ひろみ (2006a) の視点

坪井もまた Hashemi, Schuler & Riley と同様に、「サリーの購入」を女性のエンパワーメントの指標として研究した。坪井が研究調査の対象に選んだのもやはりバングラデシュのグラミン銀行に参加している女性たちである。

彼女たちを対象に、サリーを購入するのは、女性本人か男性の家族成員か、女性が選ぶ場合でも男性家族成員の助言を得たかどうかなどについて聞き取りをした。総数 160 名へ聞き取りした結果は、サリーを自分の意志で選んだのが 57 人、(自分の意志で・・・筆者追加) 選ばなかったのは 40 人、夫や息子と一緒に選んだのが 63 人であった (坪井 2006a: 9)。

「自分のサリーは自分で選ぶ」女性の数が 57 人というこの数字を高いとみなすか低いとみなすかは判断が分かれるところである。バングラデシュはイスラムの国で、イスラムの社会は家父長制のかなり強い社会である。もちろん、パルダの規範 (女性の隔離 詳細は後述) もあり、女性が単独で外出したり買い物へ行ったりするには強い社会規制が働く。そのような状況のもとで 57 人、35.6%もの女性が自分で決断し、購入したと言うことは、評価されるべき現実である。すなわち、「大きな物品」の購入決定権を獲得したということ、エンパワーメントが起こっているということである。

坪井が対象とした女性たちは、グラミン銀行に参加している女性たち、言い換えればエンパワーメントされたあるいはエンパワーメントの過程に入った女性たちとみなすことができる。そのために、これだけ高い数字になったとみるのが妥当だろう。

3) サリー

ここで、サリーについて紹介する。サリーとは、インドやバングラデシュ、スリランカなど南アジアの女性たちが「普通」着ている民族衣装で、幅約 90 センチ、長さ 5～6 メートルの長い布である。単純に言えば、これを身体にくるくると巻き付けるようにして着ている (写真 1 参照)。着付け自体は難しくないが、身体を締めつ

けないように、しかし着崩れしないように、美しく着るにはコツがあり、着慣れるには練習が必要である。インドは、都会では核家族化も進んでいるもののまだ大家族 (Joint family⁶⁾) で生活している場合も多く、家には複数の女性がいて、お互いに手伝い合って綺麗に着付ける。

布の約半分を腰の位置で身体の右から左回りに巻いてスカート部とし、残りの半分はプリーツを作って胴の前の部分でペチコートに挟み込み、それから胸を覆うように前身を横切らせて左肩にかけ (写真1左)、背中に垂らす (写真1右)。この着方は、インドでよく見られる着方である。サリー布本体の両端 (ボーダー) は、通常、中央の部分とは対称的な色や模様になっている。インドでは、このサリーの着方により、カーストや出身民族など所属が分かるという。日本の和服も、襟足の抜き加減、裾の文、着物の色や模様で年齢や身分が分かるようになっている。着衣で属性を示すのは、多くの文化において普遍的にみられる。

サリーの価格は、材質や品質により天文学的な差がある。安いものでは100ルピー⁷⁾あたりから、高いものは数千ルピーである。特段に高いものは数万ルピーもすると言う。西ベンガル州の州都コルカタ (旧名カルカッタ) 市内のゴリアハットやパーク・ストリート、サダール・ストリート周辺では、1枚600ルピーから2,000ルピーが中心である。店頭で飾られていた金糸の刺繍が施された豪華なものは8,000ルピーの値段が付いていた。この状況は、「購入する側の経済力に見合ったサリーを選ぶ」ということになるのだろうか。

インドの経済格差は極めて大きく、「平均して」とかあるいは「一般に」というくり方には無理がある。参考として、西ベンガル州の労働者の月収をみてみよう。西ベンガル州にある前述のDRCSの保育園の場合、園長は1,400ルピーで他の保育士は900ルピー、そのDRCSの職員は2,000ルピー程度、ICDS⁸⁾の職員はやはり2,000ルピー、小学校教員は月6,300ルピーである⁹⁾。サンタル民族のような貧困層の場合、農閑期には道路工事や石切り場、レンガ工場などで日雇いの賃労働に就くことが多い。最低賃金は各州で異なるが、西ベンガル州では1日80ルピー (2006年) である。また、2006年、政府が導入した雇傭政策¹⁰⁾では1日60ルピーである。ただ、中間で搾取されることが多く、労働者の手元に渡されるのは、女性で40 - 60ルピー、男性で50 - 70ルピーである。毎日賃労働に就くわけではないので、月収は400ルピーから1,000ルピー程になる。したがって、サンタル民族のような貧困層の場合、女性たちが着るサリーは1枚100ルピー位だというのが¹¹⁾、1枚100ルピーのサリーでも、気軽に買えるわけではない。彼らが、サリーを新



しく買うのは、お祭り (プージャあるいはメラ) のような特別なとき、あるいはあまりにも古くなったりほころびたりした時である。お祭りのときには、1枚65ルピーという安価なサリーも出回る。

4) サリーの所持枚数

次は、一人の女性もっているサリーの枚数をみてみよう。一人の女性もっているサリーの枚数は、女性の経済状況、そして世帯の経済状況を推測する手がかりとなる。

サンタル民族の農村の現地聞き取り¹²⁾では、一人平均4 - 5枚であった。インドで近年増えてきた「中間層・中産階層¹³⁾」の月収入は2,265 - 4,450ルピーである (重松 2003)。自分は「中間層・中産階層」に属するとする女性に持っているサリーの枚数について質問すると、「50 - 60枚、数十枚が普通でしょう」であった。さらに経済力のある家庭の女性の場合は100枚以上、「数えたことがない」ほど持っているという。これらの情報を基に考えるとサリーを4 - 5枚しか持っていないサンタルの女性は、かなり貧困だと言える。

ちなみに、坪井の調査に答えた女性たちが所持するサリーの数は「3 - 4枚」と答えた回答数が一番多く、次は「5 - 6枚かそれ以上」であるという (坪井 2006b:135)。

3. サリーを買うのは誰か

サリーを着るのは女性たちである。しかし、そのサリーを買うのは誰か。コルカタの街で女性たちがサリーを選んで見かけるが、女性が一人で買い物をしてい

る事はない。娘か母親か親戚かあるいは友達らしい人がかならず傍にいる。勿論、夫か父親とおぼしき男性も見かける。彼らは女性のすぐ傍にいるか店先にいる。「他のものはないのか」「もっと別なのを見せろ」と店員に声をかけたり女性の選択にコメントをしたり積極的に買い物に参加する男性もいるし、黙って見ているだけの男性もいる。ただ、日本のデパートで妻の買い物に付き合っている男性から感じられる「早くしろよ!」というイライラした雰囲気は感じられない。むしろ「徹底的に見て本当に良いもの、気に入ったものを買えよ」と応援するような印象を受ける。経済的に豊かになり、買い物を楽しむ中間層の姿がそこにみられる。

1) サンタル民族

ここで、本研究の対象となったサンタル民族について簡単に紹介する。サンタル民族は人口500万人⁽¹⁴⁾を越し、人口の規模では3番目に大きな少数民族で、指定民族(Scheduled Tribes⁽¹⁵⁾)である。オーストラアジア語族に属し、背丈が低く、色が浅黒く、アジア系の顔貌をしている。

指定民族はベンガル語で「アデバシー:adivasi」である。「adi」は「original(もともとの)」で、「vasi」は「dwellers(住民・人々)」の意味である。したがって、「アデバシー:adivasi」は、「先住民族」となる。サンタル民族は、アーリア人が移動してくる以前からインド国内に住んでいたもので、まさに「アデバシー」である。アーリア人の進出と共にどんどん居住地域を追われ、南下して行った。そしてこの百年あまり前からは、かつての居住地域への回帰の動きが始まり、1836年頃からは政府の方針もあり(Ghurye, 1963:39)、現在、オリッサ州・ビハール州・ジャルカンド州・西ベンガル州・トリプラ州などインドの東部に集中して住んでいる。

民族の人々は「Forest People」とも呼ばれたように、彼らの生活は森林や山林と深く関わっている。サンタル民族は、もともとは狩や採集、移動耕作(Shifting Cultivation)をなりわいとし、生活の糧を自然から得ていた。しかし、近年は土地や森林という生活資源を失い、土地所有者との契約で農作業に従事する(Cultivator)、あるいは賃労働での農作業(Agricultural labourer)などで生活を維持している。農村人口のほとんどが国連の貧困ライン(1日IUS\$)以下という貧困の生活である。

サンタル民族は、通常、民族内結婚(Endogamy)、氏族外結婚(Clan Exogamy)、村外結婚(Village Exogamy)である⁽¹⁶⁾。結婚の契機は見合い(Arranged Marriage)が多い。

2) サリーを買うのは男性の仕事

女性と女性の買い物に付き合う男性の Kolkata での風

景を先に紹介したが、農村のサンタル民族の女性たちの場合は、このようにはならない。彼女たちのサリーを購入するのは彼女たちの夫や父親である。

筆者がフィールドとしているビルブム県S村において2006年9月に行った面接調査の際に得た会話の中から、サンタル民族のサリー購入状況に関する情報を提供してくれた4ケースを以下に紹介する。

S村は、290世帯の村(village)⁽¹⁷⁾であるが、「上の集落(hamlet)」「下の集落(hamlet)」「ヒンドゥーの指定カーストが住んでいる集落(hamlet)」の3つに区域に分かれている。筆者が調査に入っているのは「上の集落」と「下の集落」である。この二つの集落は合わせて68世帯あり、全世帯がサンタル民族である。

ケースA) 30代前半のHさん。妻はS村からバスで3時間ほど離れた村から婚姻によりS村へ来た。見合い結婚である。学歴はクラス7まで終了している。2000年から2007年12月現在まで、NGOが運営する多目的教育センターで保育士をしており、月約800ルピーの定収入がある。夫は、S村出身で、農作業や大工仕事の手伝いなどの賃労働に従事しており、収入は一定していない。学校へは通わなかった。二人は、結婚当時は夫の実家で暮らしていたが、最近自分たちの家を建てた。この夫婦は、結婚後7年になるというが、子どもはいなく二人きりで暮らしている。

家のことは何事も二人で相談して決めるという。例えば、夫の実家を出て自分たちの家を建てると決めたこと、その家で使う家具の購入、鶏の飼育なども二人で相談して決めたと言う。

ただ、日常の買い物はほとんど夫がする。夫は「妻は市場へ行かない」と言う。その言い方の中に、「女は買い物をしないものだ」という響きを聞き取ることができる。サリーについては、二人で市場へ行って二人で相談して買うと言う。主導権は夫が握っているとのことで、夫が気に入ったものはほとんど妻も気に入るという。(2007年9月11日聞き取り)

ケースB) 女性Bさん。20代後半。Bさんは歩いて1時間ほど離れた村から婚姻によりS村へ移り住んだ。見合い結婚が多いサンタル民族の中で、珍しく恋愛結婚である。Bさんの家で、一番発言権が強いのは姑(夫の母親)で、姑が日常のことをすべて決めると言う。

サリーは、夫が市場から買ってくるが、夫が買ったものはほとんど好きだと言う。たまに、買ったものが気に入らない場合もあるが、そのような際には「それは、気に入らないから返ってきて」と言って、どんな色やデザインがほしいか夫に伝えて、そういうのを買って

きてくれるように話すという。Bさんは、自分でサリーを買うことはないが、自分の好みを主張している。(2006年9月11日聞き取り)

ケースC) 女性Mさん。30代。MさんはS村出身で、見合い結婚をし、T村へ移った。だが、結婚生活8年目に、夫に3人の子供と一緒に実家へ連れ戻された。連れ戻されたその夜、夫は自分の村へ帰ってしまいそのまま連絡が途絶えたという。それ以降実家で暮らし続けて2年になるという。夫が迎えに来てくれたら夫の元へ戻りたいと言うが、自分では具体的に何をどうして良いかわからないと途方にくれた状態であった。

Mさんはほしいものは特にないと言う。「もし、サリーとか欲しいものがあるときは？」と重ねて質問すると「欲しいものがあつたら、お父さんに言って、お父さんに買ってもらいます」という。彼女が、自分でサリーを買うことはない。(2007年9月11日聞き取り)

ケースD) 男性Pさん。30代。Pさんの妻は自転車で30分ほどの村から来ており、見合い結婚である。自分の農地で耕作を行っている。

彼の話では「妻とはうまくいっている。何でもよく話し合う」とのことである。妻のサリーが傷んで、擦り切れたりしていたら「必要だね」というし、あるいは妻が「古くなったから新しいのを買ってほしい」という。そのような時には、妻が「こういう色、こういう柄のを買って来て」と要望したものを買うという。自分が購入したものを妻が「これは嫌い」ということはほとんどなく、「だいたい買って来たのは気に入ってくれる」という。

買い物はほとんどPさんの役割のようで、実際「買い物に行くのは男たちの仕事です」と明言している。子どもの衣類の場合は「サイズがわからないから妻も行く」が日常の食料品も妻が「〇〇が必要」「今、これがなくなっているから買って来て」と依頼するものを買うという。Pさんは、女性は夕ご飯の支度をしたり、家の仕事がいいろいろあつて買い物に行く時間がないという。さらに、「料理は女の仕事なので、自分は野菜を切るのを手伝ったり、飲み水を外から運んだり、子どもをあやしたりして手伝う」という。そしてそのように妻を手伝うのは自分だけではなく、「サンタルの村では男の人は女の人をよく手伝います」という。

「妻が買い物をするようになったら男の仕事が一つ減るので助かるのではないかと質問したら「それは正しくない」と断言した。この発言は、サンタル民族の間では、「女の仕事」「男の仕事」が明確に区別されており、買い物は「男の仕事」とみなされていることを示している。(2007年9月11日聞き取り)

3) 聞き取りから

サンタル民族の村の聞き取りからサリーを購入するのは、夫あるいは父親すなわち男性であることがいえる。妻が自分で店へ行き、自分で選んで買うということはない。

夫が購入してきたサリーを気に入らない場合は、自分の好みのものに取り換えに行かせたりするケースもあったが、ほとんどの場合、妻は夫が買ってくるサリーを気に入るという。夫が、色や模様などどのようなサリーが欲しいか妻に前もって聞くこともあるし、また、妻が自分の好みを夫に伝える場合もある。そのような場合でも、夫の経済状況を把握しているので買えそうな価格のサリーを望むという配慮もしている。ここに、サンタル民族の夫婦が、お互いの状況をよく理解し合い、「身の丈」に合わせて「足るを知り」、仲むつまじく暮らしている様子が描き出される。

4. 男と買い物

サンタル民族の場合、買い物は男性の仕事である。サンタル民族の女性は普段お金を持っていない。必要な時には夫からもらい、砂糖や塩などの日常の小さなものを買うこともありうるが、基本的には男性が購入する。

仕事は、「女の仕事」と「男の仕事」と区別される、それは性によって役割が割り振られる性別役割分業である。それは、その社会に社会規範、ジェンダー規範があることを示す。サンタル民族の社会では、買い物は「男の仕事」である。だから、男性が買物をするのは規範に則っているのだから「正しい」ことであるが、女性が買物をするのは反するので「正しくない」とされるのである。Pさんの「女性が買物をするのは正しくない」という発言はそれを示している。

男性が世帯経済の責任者(Bread winner)とみなされるのは、一定程度普遍的にみられることである。しかし「世帯経済の責任」と「買い物は男の仕事」とを結びつけるには、もう少し議論の余地がある。サンタル民族が「買い物は男の仕事」と考える理由あるいは背景を続けて検討する。

1) 買い物は誰の仕事か

男性が世帯経済の主たる責任者であることは通文化的に言える。世帯経済の責任とは、世帯の成員に対して生存して行くのに必要な糧(金あるいは生活物資)を保障する事である。収入は通常の場合、貨幣として財布に保管される。となれば、財布の管理は男性の責任になり、買物が男性の仕事になり得る。しかし、収入を得ること、財布を管理すること、生活物資を購入すること、これらの役割が同一の人間に集中する必要は必ずしもない。

前述した内閣府の調査にあるように「買い物は女の仕

事」とする日本の例をみてみよう。近代日本では「男は仕事、女は家庭」あるいは「男は外、女は内」が通念となっている。これは、収入を得てくるのは男性の役割であるが、その金で生活を回して行くのは女性の役割という考え方である。この通念が成立した背景については、紙幅の制約もありここで詳細に議論できないが、一つには、「男子たるものが、生活の雑事にとらわれることはあってはならない」という儒教的な理念が根底にあるだろう。ここから、「男子厨房に入らず」の戒めも出てくる。買い物が厨房の延長にあると考えれば、買い物は男性の仕事ではなく、女性の仕事となる。近年は、妻と一緒にスーパーマーケットで買い物をする男性も珍しくなくなったが、「買い物は女性の仕事」という感覚は年配の男性にはいまだに残っている。

ただ、「女性が買い物をする」「女性は財布を持っている」ことは、直ちに日本の女性が購入決定権のすべてを握っていることを意味しない。前述した総理府の統計にあるように日本の女性が持っているのは、食料品や日常生活雑貨の購入決定権だけであり、家や家財道具、耐久消費財などは含まれない。世帯に関する決定権の一部を委譲されているだけであり、決定権の大きな部分は男性にある。

以上をまとめると、買い物を担当するのが女性となっている文化はあるが、その場合でも、女性が決定権を行使できるのは日常の消費財に限られており、大型消費財・不動産までは及んでいない。女性は限られた範囲の購入決定権しか持っていないのである。

2) 「外の仕事」は「男の仕事」

一方、買い物が男性の仕事という文化は世界的に見ても少なくない。代表的なのはイスラムの文化である⁽¹⁸⁾。イスラムの文化では、買い物は男の仕事である。これには三つの理由が考えられる。一つには家族を養うのは男性の義務であること、二つには家計の独占、三つには女性の隔離である。

イスラムの文化では、女性（妻）や子どもを養うのは男性（夫）の義務と定められている。だから生活に必要なものを買って与えるのが男性の役割だという考え方になる。だが、「養う」ことは経済的責任を果たす事であり、それは必ずしも男性が「買い物をする」ことと同義ではない。日本のように購入決定権の一部を女性に委譲することも可能である。しかし、それをしない。

イスラムの文化で、購入決定権のたとえ一部でも女性に委譲しないのは、家計の独占が目的である。家計を独占するねらいは、もちろん最終的には、家父長の権力を維持することにある。

しかし、購入決定権の配分、一部委譲が行われない理

由としては、これら2つの考え方は説得力に欠ける。男性が買い物をする決定的な理由はやはり、三つ目の「女性の隔離」、パルダであろう。

イスラムの世界では、女性が外へ出ることを極力避ける慣習がある。これが、パルダである。パルダは、本来「カーテン」の意味で、女性をカーテンの中に隠す、つまり女性を家の中に閉じこめる「女性隔離」である。子どもの頃は男女一緒に遊ぶことがあっても思春期になると女と男の世界は厳密に区別される。たとえいとも同士でも親戚でもカーテン越しにしか会話しない。このパルダは、イスラムの慣習とみられがちだが⁽¹⁹⁾、広く南アジアで行われており、ヒンドゥー社会でもみられる(Engels 1999)。パルダには女性保護の機能があるとパルダを擁護する議論もある。しかし、女性の社会化を妨げる機能の方が大きく、パルダが家父長制を強め、女性を社会から切り離してきたという負の作用を見過ごしてはならない。

買い物という行為は外部者との接触を伴う。商人が「行商」というかたちで家々ごとにまわって歩く場合もあるが、多くの場合は「市場」という割り当てられた一区画の地域に売る方と買う方が集まって行く経済・商業活動である。女性が他の男性と出会う事を避けるためには、外出を伴う買い物は当然男性の仕事になる。

したがって、買い物が「女性の仕事か男性の仕事か」という問い掛けは、「外へ行くのは誰か」という視点で議論されるのではなく、女性がどれだけ購入決定権を行使できるかという視点で議論されることが重要なのである。つまり、世帯経済のコントロールに対して女性がどれだけ「力の配分」を行使できるかがポイントなのである。

5. サンタル民族の女性はなぜ買い物をしないのか

では、サンタル民族の女性はなぜ、サリーを自分で買わないのか。本章では、彼女たちの社会的・文化的地位と経済的力量との関係でこの疑問について考えてみよう。

インドの民族に関する研究では、前述したように多くの研究者が「民族ではヒンドゥー社会に比較して、女性の自由度が高い、あるいは女性と男性が社会的に対等な地位にあった」としている(Maharatna 2005:29; Fernandes 2006:113; Mukhopadhyay 2002:137)。民族で社会的・文化的性差が殆どなかったことの証左としてよく挙げられるのが以下のような項目である。

- ① 女性と男性の人口比が小さいこと (Maharatna 2005:260)
- ② 特に、女兒と男児の人口比が小さいこと
- ③ 結婚年齢が民族では高いこと (Rath, 2006:31; Roy 1998:4)

- ④ 出産年齢が遅いこと (Rath, 2006:31)
- ⑤ 結婚にあたって、ダウリを払うのではなく、花嫁料 (Bride Price) を払うこと (Verma 1990:32; Kumar, 2000:3117; Singh 1994: 1044)
- ⑥ 労働市場への参入率が高いこと (Singh 1994: 9; Chacko 2005:12)
- ⑦ パルダの規範がないこと (Roy 1998:4)

Pant は、男性が買い物をする理由について、これをパルダの規範によると理解している (Pant 2000: 95)。彼女が調査したのはラージャスタン州のジャイプル市で、そこはイスラム圏で家父長制の強い地域であり、男性が買い物をする理由はパルダ規範によると考えるのは妥当だろう。しかし、サンタル民族の場合も「パルダのゆえ」と断定するにはためらいがある。前述したように、Roy はサンタル民族ではパルダの規範はないとしている (1998:4)。中根も、「ベンガルでは (パルダは・・・筆者補足) みられない」としている。この「ベンガル」が、ベンガルの主流人口だけを意味するのか、ベンガル地域全体を示すのか明確ではないが、いずれの場合にも、サンタル民族にパルダの規範があるとは考えにくい (1993: 166)⁽²⁰⁾。

女性たちは田畑へ出て男性と同等に農作業に従事した。女性たちが戸外労働に従事していたということは、女性が外へ出るということを抑制するという社会規範が強くないことを示している。実際、女性たちは村の男性と自由に会話し、祭りでも自由に参加し、女性も男性も一緒になって踊る。女性の飲酒に対しても規制はなかった (Kaviraj 2001:62)。また、ベンガル地方で、ベンガルの人々にサンタル民族の女性に関して意見を求めると、ほぼ全員がサンタル民族の女性の活動範囲の広さと自由さ、男性と一緒に農業に従事するたくましさや力強さ、祭りでは女も男も入り交じって歌や踊りそして飲酒を楽しむと話す。そして自分たちとはとても異なると言い、サンタル民族の女性に関してパルダはないと否定する (2008年3月の調査)。

女性たちは、食物や水資源に平等のアクセスを持ち、夫と対等な世帯経済維持者とみなされている。樹木や草木の薬用効果にも周知するなど自然資源を利用する知識を豊富に持ち、世帯の福祉に大きく貢献したことも報告されており、サンタル民族の女性は男性と比較的対等であったと考えることができる。

このような背景をもとに考えると、サンタルの女性が買物をしない理由は別にあると考えられる。したがって、この章では、1) サンタル女性の経済力、2) 女性の保護、3) 女性の多忙さという3つの理由を検討してみたい。

1) サンタル女性の経済力

サンタル民族の社会は、父系制で家父長制 (Patriarchal and patrilineal) である。家父長制の社会では、世帯経済の実権を握るのが家長である。世帯経済に女性もつアクセスの度合いは文化・社会により異なるがコントロールできる経済的力は通常小さい。

土地に対する所有権も女性は持たない。サンタル民族の社会では、耕作地は通常村が所有権を有し、世帯は耕作権を得て、耕作する。この耕作地の面積は多少変動することもあるが、基本的に耕作権は世帯に保障されており、この権利は遺産として相続される。ただ、女性には相続権はなかった。世帯主に息子がいない場合、一時的に未亡人が相続することもあるが、その場合も娘が結婚し、その夫が相続するまでの期間である (Kumar 2000:3122)。

相続権を認められないということは、女性の経済的脆弱性を示すものと考えられる。Chako (2005) の「女性は自分の収入をコントロールできた」という記述は内職などにより得られた個人の収入に対するコントロールに限られると考えた方が妥当で、基本的に世帯経済に対して男性と同等のアクセスをもつということではないと考えられる。

2) 女性の保護

サンタルの世界では人間は2種類とされる。すなわち、サンタル民族 (Hor) か外部者 (Diku) である。外部者との交流は経済活動に限られており、その関係はいつも外部者が雇用者でサンタル民族が被雇用者であり、それは搾取と被搾取の関係であった (Singh 1994: 1043)。となれば、サンタル民族が外部者に対して抱くのは、好感よりは警戒感であろう。事実、イギリスの植民地支配が始まってから、サンタル民族の生活領域にイギリス人やヒンドゥーの人々が入り込み、これらの外部者は、サンタル民族の生活を壊滅的に破壊して行く。鉱山資源の発掘 (民族の土地には多くの鉱物資源がある)、運送のための鉄道敷設の労働力としての強制収用、土地の賃貸料や大地主の無理な課税の導入、高利貸など、サンタル民族の経済は壊滅的で貧困化は一段と進んだ。このような暴力的な抑圧の先鋒にたったのがヒンドゥーの人々である。外部者たちは、サンタルの女性に暴力をふるい陵辱した。侵入者たちの非人道的な行為はサンタル民族の大きな恨みをかい、やがて1855年のサンタル蜂起へとつながって行く (Kaviraj 2001)。

自民族の女性を守るのは男性の役割である。外部者が出入りする市場に女性が出入りするのを規制するのは危険を回避する上で当然の対応となる。したがって、女性保護の目的で女性を外部者と接触させない、女性を地域

から出さないという理由付けができる。

3) サンタル民族の女性の多忙さ

サンタル民族の女性が買い物をしないもう一つの理由として、女性の多忙さがあると考えられる。女性たちの日常は、男性に比較して多忙である(田中 2002:48)。先の内閣府の国際比較調査でも、家事の主な分担者は女性であり(2002:93)、女性の多忙さが示されている。

尾坂(2003)は、インド中央部の農村で1000人の女性を対象とした調査の報告をしているが、それを見ると「食糧・日用品の購入」以外の世帯内における家事はすべて女性(妻)が行っている。女性は忙しいのである。

ここで、面接対象者のPさんの話しをもう一度振り返ってみよう。Pさんは「女性は食事の支度をしなければならぬし、家の仕事がいっぱいあって忙しい(だから買い物に行く時間がない・・・筆者による補足)」と話している。農村の女性は忙しい。農作業に夫と一緒に従事する他に、世帯の仕事をごささなければならない。

また、女性たちの多忙さは開発の結果一層ひどくなっている。以前、生活資源を得ていた森林は、遠くになったり、国や政府あるいは地主の所有となり使用料などのため、アクセスできなくなったりと困難になっている。その結果、調理のための薪集め、水くみなどに以前よりずっと時間がかかるようになっていく。

さらに、サリーを扱う程度の(大きな)店は、サンタル民族が住む地域(hamlet)にはない。地域にあるのは、塩、砂糖、ランプに使う灯油(ケロシン)、マッチ程度を扱うキオスクレベルの店のみである。サリーを買うためには街へ出なければならず、多くの場合1日仕事になる。多忙な女性がわざわざ街へ出向くわけにはいかない。

このように女性の生活は多忙を極めており、買い物に行く時間を確保できない状況がある。

結論

以上のように、サンタル民族の女性たちが自分のサリーを自分で買わない理由として、1) サンタル女性の経済力の実態、2) 女性の保護、3) 女性の多忙さという3点を挙げ、検討してきた。

サンタル民族の女性は、かつて男性と対等に戸外労働に従事していたし、生活の維持者でもあり、彼女たちの社会的・文化的地位は決して低いものではなかった。しかし、親の死亡にあたり遺産を相続できないなど、経済的力量に関しては男性と対等ではない面があった。そこには、男性が世帯経済の実権を握るという社会構造があった。家父長制は女性を周辺化する(Boserup 1989)のである。

また、開発が、必ずしも女性にとって望ましい方向へ

進められてこなかったことは指摘されている通りであり(Boserup 1989; 田中・大沢・伊藤 2002)、開発の進行と共にヒンドゥー社会との関わりが深くなってゆく。他民族の暴力的行為から女性を守ることは、男性への依存度を高め、女性の社会進出が遅れることとなる。またヒンドゥー化の進行と共に、サンタル民族の女性に対して抑圧的に作用する力が大きくなり、彼女たちの社会的地位の低下につながる。

「夫が購入したサリーはほとんど気に入る」と言いつつも、「できれば自分で見て、選んで買いたい」というホンネをもらす女性もいる(2008年3月の調査)。中間層の女性のようにサンタル女性が自分の欲しいものを自分で選んで購入できる機会が広がる事を祈念したい。

謝辞

本稿作成にあたり、インド国西ベンガル州で活動している開発 NGO・Development Research Communication and Services Centre のスタッフであるチャタジー公子氏、ドルガシャンカール・パルダン氏、ドルガダス・トゥドゥ氏にS村およびサンタル民族に関する資料収集・提供の協力を得たことをここに深く感謝する。

本研究は、科学研究費・平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C)、課題番号 18530435)によるものの一部である。

(受理日:平成20年5月8日)

引用文献

- 1) 瀬地山角(1996)『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』勁草書房、pp.232-233

参考文献

- 尾坂良子(2003)「インドにおける生涯にわたる健康とジェンダー」(財)アジア女性交流・研究フォーラム
(2003)『アジア女性研究会』第12号、pp.107-111
- 重松伸司(2003)「中間層・中産階層 —21世紀インドは豊かな市民を生み出すか?—」重松伸司・三田昌彦編著(2003)『インドを知るための50章』明石書店、pp.62-64
- 瀬地山角(1996)『東アジアの家父長制 ジェンダーの比較社会学』勁草書房
- 田中由美子・大沢真理・伊藤るり編著(2002)『開発とジェンダー エンパワーメントの国際協力』国際協力出版会
- 田中由美子(2002)「ジェンダー分析」田中由美子・大沢真理・伊藤るり編著(2002)『開発とジェンダー エンパワーメントの国際協力』国際協力出版会、pp. 42-56

- 千葉たか子 (2007a)「エンパワーメント指標考察—ジェンダーと開発の領域で—」青森県立保健大学 (2008) 『青森県立保健大学研究雑誌』第8巻第1号 pp.27-36
- 千葉たか子 (2007b)「マドプール村の開発—インド国西ベンガル州の少数民族の村の変化—」青森県立保健大学 (2008) 『青森県立保健大学研究雑誌』第8巻第2号 pp.225-235
- 千葉たか子 (2008)「オンクル・カラ」(財)アジア女性交流・研究フォーラム (2008) 『アジア女性研究会』第17号、pp.55-61
- 坪井ひろみ (2006a)「貧困女性の貯蓄・消費行動とジェンダー—バングラデシュ・グラミン銀行の事例—」(財)アジア女性交流・研究フォーラム (2006) 『アジア女性研究会』第15号、pp.1-10
- 坪井ひろみ (2006b)『グラミン銀行を知っていますか 貧困女性の開発と自立支援』東洋経済新報社
- 内閣府男女共同参画局 (2003)『男女共同参画社会に関する国際比較調査 (平成14年度調査)』
- 長田俊樹 (2003)「指定部族」重松伸司・三田昌彦編著 (2003) 『インドを知るための50章』明石書店、pp.103-105
- 中根千枝 (2002)『社会人類学 アジア諸社会の考察』講談社
- 中根千枝 (1993)『家族の構造』東京大学出版会、初版1970年
- Boserup, E.(1989)*Woman's Role in Economic Development*, Earthscan, London
- Banerjee, J.(2002)' Women as Witch,' Sedhar, in Bose.(ed) *The Santhals*, The Viveka Foundation, New Delhi, pp.32-37
- Chacko, P.M.(2005)*Tribal Communities and Social Change*, Sage Publications, New Delhi
- Das, N.(1972) 'The Tribal Situation in Orissa' in Singh, K.S.(ed.)(1972) *The Tribal Situation in India*, Indian Institute of Advanced Study, New Delhi, pp.172-180
- Engels, D.(1999)*Beyond Purdhe?/Women in Bengal 1890-1939*, Open Univ. Press, London, Soas Studies on South Asia
- Fernandes, W.(2006) 'Development-induced Displacement and Tribal Women,' Rath, G. C.(ed.)(2006) *Tribal Development in India*, Sage, New Delhi, p.112-130
- Ghurye, G.S.(1963)*Scheduled Tribes of India*, Transaction Books, U.S.A. and London
- Hashemi, S.M., et al.(1996) 'Rural Credit Programs and Women's Empowerment in Bangladesh,' *World Development*, U.S.A. Vol. 24, No.24, pp.635-653
- Kaviraj, N.(2001) *Santal Village Community and The Santal Rebellion of 1855*, Indranath Mazumder of Subarnarekha, Calcutta
- Khanna, M.(2002) 'Widowhood in India: Trauma of Taboos and Tribulations' in Giri (ed.) (2002) *Living Death / Trauma of Widowhood in India*, Gyan Publishing House, New Delhi, pp.19-49
- Kumar, J.L.(ed.)(2000)*Encyclopaedia of South-Asian Tribes*, Anmol Publications, New Delhi, Vol.10, p.3114-3130
- Maharatna, A.(2005)*Demographic perspectives on India's Tribes*, Oxford University Press, New Delhi
- Mukhopadhyay, L.(2002)*Tribal Women in Development*, Publication Division of MIBGI, Delhi
- Pant, M.(2000) 'Intra-household Allocation Patterns: A Study in Female Autonomy,' *Indian Journal of Gender Studies*, Sage, New Delhi, 7:1 2000, pp.93-100
- Rath, G.C.(2006) 'Introduction' in Rath, G.C. (ed.)(2006)*Tribal Development in India/ The Contemporary Debate*, Sage, New Delhi, pp.15-62
- Roy, S. et.al(1998)*Santal Architecture*, Folk & Tribal Cultural Centre, Kolkata
- Singh, K.S.(1994)*People of India, National Series Volume III, The Scheduled Tribes*, Oxford University Press, Delhi
- Verma, R.C.(1990)*Indian Tribes/ Through the Ages*, Publication Division, Govt. of India, New Delhi
- インターネット
インドの国勢調査 <http://www.censusindia.gov.in/Metadata/Metada.htm> (2007.12.12)
「インド雑貨屋 SUNDAR」<http://sundar.jp/> (2008.01.22)
- 脚注
(1) サントル民族の詳細については、千葉たか子 (2007b) を参照されたい。
(2) サントル民族には、女性たちがとても強く、男性たちは妻に頭が上がりず、妻たちの横暴に耐えかねた男性達が神様の所へ行き、どうしたら女性たちをコントロールできるか相談に行ったという昔話がある (Banarjee 2002)。サントル民族の女性の強さを示す話として興味深い。
(3) 家父長制の定義については様々な議論がある。本稿では「男性が女性を支配する権力関係の社会的仕組み」

とする。

(4) 「エンパワーメント」の定義については多くの議論があるが、本稿では「社会的に周辺化された人々の内在的な力を引きだし、状況を変えて行く過程」と定義する(千葉 2008)。

(5) Grameen Bank、創始者はムハマド・ユヌス博士(2006年ノーベル平和賞受賞)

(6) インドの家族の形態は、社会人類学の権威である中根千枝(2002)が「合同家族(Joint family)」としているので、本稿ではその表記を踏襲する。

(7) 1ルピー=2.8円で換算(2007年12月12日の為替レート)。100ルピーは約280円。

(8) Integrated Child Development Services(ICDS)Scheme: 総合子ども発育サービス。これは、日本の保育所と共通の目的をもった施設とみなすことができる。

(9) 2006年の調査による。

(10) 2006年4月から2007年4月までを第1次とした雇用政策(The National Rural Employment Guarantee scheme)。農村の貧困世帯を対象に、1世帯につき1名に、100日間の賃労働を確保するという貧困対策。仕事は主に、植林、道路など村のインフラ整備である

(11) 2006年9月、2007年9月の調査の聞き取り。

(12) 2006年9月、2007年9月の調査の聞き取り。

(13) インドの「中間層・中産階層」の定義・概念などは重松伸司(2003)を参考にされたい。

(14) 2001年の国勢調査

(15) 独立後のインド憲法は第342条において、「指定民族」のリストを載せている。しかし、「指定民族」の定義はかならずしも明確ではなく、例えば、本稿の対象であるサンタル民族の場合、オリッサ州・ビハール州・ジャルカンド州・西ベンガル州・トリプラ州に住むサンタル民族は、「指定民族」であるが、アッサム地方に住むサンタル民族は、「指定民族」にはなっていない。1991年の国勢調査では500以上の「指定民族」がリストに数えられ、その人口は、インド人口の約8%を占める。また、Scheduled Tribesの邦訳として、インド研究者の長田(2003)は「指定部族」としている。しかし、「部族」という言葉のもつ差別的な意味合いを根拠に「民族」とする研究者もいる。筆者は、後者の考えに共感するもので、研究においては、「民族」を用いている。

(16) ExogamyとEndogamyの表記は資料の記載にしたがった。「誰と誰が結婚できるか」は人類学的に重要なテーマで議論も多い。サンタル民族の場合は、女性が生まれ育った村を出て、男性の村へ移り住む形態をとる。サンタル民族の氏族は12あり、同姓および婚姻が禁じられている氏族の組み合わせがいくつもある。詳細は千

葉(2007b)を参照されたい。

(17) 尾坂良子は、インド中央部の農村社会でも買い物は男の仕事であると報告している(2003:111)。

(18) 2001年国勢調査

(19) 田中由美子・大沢真理・伊藤るりらは、「イスラーム社会で、女性を家族以外の男性の視線から隔離する社会習慣」としている(2002:322)。

(20) インドのパルダの状況については中根千枝(1993)pp.165-167に詳しい。